

【修士論文要旨】

信州の穢多・平人

～ 近世・近代における関係の変容 ～

井 貝 陽 介*

本論文は信州における穢多身分の人々と、農民や町人といったいわゆる平人との関係を具体的に考察することを目的としている。

穢多とは、少数で、差別される人々だが、近世各地域においてその社会を機能させるべく重要な役割に従事していた重要な人々である。穢多と平人の関係は、ただ隔絶された関係なのだろうか。近世被差別民は蔑視された存在であると考えられているが、近世の穢多と平人との関係を調査してみるとその中身はどうなっているのか。全国的な大まかな流れを理解するだけでは、当時の穢多と平人の関係を解明するに至らないであろう。どこか特定地域の保持している特殊性を見ることができないからである。部落問題の把握にも画一的なものであるのではなく、具体像ではなくてはならないのである。そこで重要であると考えられる観点が、地域的な研究である。各地域に存在していた歴史を考察することが部落の具体的な過程を理解するに必要不可欠である。

では調査を行う場所の選択をどうするか。例えば、部落問題について多く言及されている地域に関西を取り上げることができる。関西地方には渡辺村という非常に大きな穢多たちの集落が存在していた。周囲の革細工を集積する地点を兼ねていた場所であるので、他国との繋がりが深いために多数の史料があるので、調査もしやすいという利点はある。また、明治以降の部落改善運動も多く為されている点から近世のみでなく近代以降の調査も行えるという利点がある。しかしながら、調査のし易さから逆に新しく研究を行うには、新観点からの調査も行い難い恐れもある。そのため、関西とは少々離れた場所の調査を行うのであれば果たしてどこを取り上げるべきかを思索したその結果、本論文で取り上げた地域が信州である。関西や、関東から少々離れた場所に存在しており、また信州の北部や東部に穢多の集落が多見受けられた。それは、『長野県史』や『長野市誌』から穢多に関する記述も見つけることができたため間違いない。そこで私自身、信州地域の調査を実施できるのではないかと考えたのである。

では、そもそも信州地方とはどのような沿革の地なのか。近世における信州とはどのような

*中部大学大学院 国際人間学研究科歴史学地理学専攻

場所であったのか。信州には大小合わせて一九の藩で成り立っていた。その中で、穢多たちは中部から北部にかけて居を構えていた。本論文にては、その中の信州中部にかけて中心に調査を行っていく。すなわち、上田藩、小諸藩、岩村田藩、田野口藩、須坂藩、松代藩といった地域である。史料的には、松代や小諸のものを多く活用している。領地としては、善光寺や戸隠神社、諏訪大社等といった寺社領も多く存在している。

近代になると、慶応四（一八六八）年に現飯山町一帯である飯山陣屋が明治政府の府藩県制導入により、伊那県となる。明治三（一八七〇）年になると伊那県の北信部分が中野県として分立する。しかし、中野県では同年末日に近世信州における大一揆の中野騒動が発生している。天候不順や水害による凶作で米価をはじめとする物価の高騰する中で、匱乏が流入しており貨幣に関して大混乱が生じていた。そんな中で、新政府の定めた税金は増額される一方であった。中野県の人々は、減税を求めるも却下された。結果、民衆の怒りが爆発し一揆が発生したのである。その過程で中野県庁は喪失してしまった。翌年、明治四（一八七一）年に中野県は善光寺領を編入、消失した県庁を中野から長野に移転して長野県が発足することとなった。同年には、伊那県が信濃と飛騨の一部と統合、筑摩県として信州南部を統轄するため設置がなされた。その後、明治九（一八七六）年に飛騨の地域は岐阜県と合併を行い、信濃地域は長野と合併し筑摩県は消滅し現在の長野県の形が出来上がったのである。

この信州地方での部落史の先行研究としてはどのようなものがあるか。まず、研究手法として地域密着の特殊性、動向を調査していく手法が挙げられる。斎藤洋一や塚田正朋は信州にスポットを当て、当地の生活基盤を明らかにしていくことを中心としている。斎藤は部落の人々の理解のため『五郎兵衛新田と被差別部落』（三一書房 一九八七）や『被差別部落の生活』（同成社 二〇〇五）で近世被差別部落の人びとも地域社会の一員として、百姓や町人とは異なる分野、異なる仕方で社会を支えてきた人々を調査している。塚田は、『近世部落史の研究 ―信州の具体像―』を始めとする研究がある。両者ともその土地の集落の様子、近世になると頭を任命して統制を行っているという支配体制の事実を解明している。穢多たちは村の警備役としても集められ、牢番としての役割がどのようなものであったのかについて論じている。また警備役以外にも生業の斃牛馬の処理や農民から受け取る収入に関する研究がなされている。斎藤や塚田の研究は、信州佐久地方の被差別部落史料から彼らの社会的役割と生活の実態を探り具体像に迫り、その地域性を明確にすることを重点としている。

斎藤や塚田の研究の中では、仕事での付き合いには触れているものの差別に関わる事柄にはあまり触れられていなかった。そこで私自身は、信州の史料を活用することで穢多と平人の関係を見受けられないかと考え、調査を行った。まずは、差別的な関係がどのようなものであったのかから調査を行ったが、差別があるという側面のみで考えていいのかと疑問を抱いた。信州での史料を調査していると確実に同一の共同体で生きる仲間としての意識を持っていることが判明していったのである。共同体の仲間意識を持ち支え合うという考え方は、部落問題研究所が刊行する『部落の歴史』の中で塚田が可能性に言及している。さらに、上杉聰の研究にお

いて触れられている。上杉は穢多たちの持つ「穢れ」に対する忌避意識が希薄化していくことによって穢多に対する阻害が弱まったことによる差別意識の低下を挙げている。また、上杉は本論文にて述べる様な交流の様子を土佐藩における規制令の様子から考察している。上杉の掲げる交流の面に関しては私自身同意し、当時の身分制度に対する揺らぎを解する事柄として挙げられるであろう。

史料から考察を行ってみると穢多と平人の関係とは差別で以て応対する関係では決して無い。身分の違う者同士であるから、接触する中で何がしかの差別は勿論存在するであろうが、差別一辺倒という見方で終わらせることは正しい部落像の理解とすることはできないだろう。

しかし、交流の存在した穢多と平人の関係も近代を迎えることによって大きな転機を迎えることとなる。近世から発生する身分解体によって穢多であった人々と平人との間で、大きな対立要素が発生する。その要素の結果、様々な運動が発生していくがそのことに関しては信州の民権百年実行委員会による『信州の民権運動史』（銀河書房 一九八一）などにより信州各地に詳しく述べられている。

そこで、近世と近代において穢多身分であった人々の在り方を述べる。近世と近代での差異の調査により現実にあった穢多の生活、すなわち平人との交流や差別の様子を取り上げ比較し、差別一辺倒ではない部落史の参考、議論の材料とする。

近世と近代において穢多身分であった人々の在り方を述べる。近世と近代での差異の調査により現実にあった穢多の生活、すなわち平人との交流や差別の様子を取り上げ比較し、差別一辺倒ではない新たな部落史の参考、議論の材料となる論文を目標とした。

本論文の構成は、全四章によって章立てられている。

第一章においては、近世における穢多身分の生活として、生活を支える旦那場からの収入、旦那場から得られる特殊な収入源についての解説を行う。生活の中で取り上げるべき事例として穢多身分の生活として殊に大きく取り上げられる皮革細工についての簡単なまとめを行う。また、皮革細工を行うための旦那場に関わる警備役についてにも簡単に触れる。また、穢多身分は副業として農業が許されていたため、土地を所有し、または小作の仕事に従事するものも少なくなかった。そのため特殊な畑作も含めた解説を執り行う。その上で、規制令から確認できる差別の在り様を確認しよう。差別が大きく取り上げられる穢多身分を知るため、敢えて差別的な側面から確認を行う。その上で、決して差別一辺倒ではない当時の交流を、次章にて証明する。

そのため、第二章では当時存在していた交流について論ずる。平時からの生活苦についての文書を読み解き、平人との交流を読み解く。また、難渋の際に行われる本村や役人からの援助の村毎の差異を考察、役人側からの救済という繋がりに触れ平人との交流のみではない穢多身分の成り立ちを確認していく章とした。

第三章では、近代に入り新たな局面を迎えた部落に対する人々の反応を取り上げる。明治四（一八七一）年八月二八日、四民平等を旨とした解放令が發布された。これに対し、穢多であっ

た人々は堂々と平人と同じ土台で経済活動を行える土壌がくみ上げられた。しかし、中には特権が失われ不況に陥る人々もいる。そのため新平民と認められることにより、新たな身分での義務に従事する人々もいる。同時に、新たな身分を受け入れず古い特権にしがみつく人々がいる。旧穢多身分同士のみではなく、平人からも疎まれることとなっていく様子も掲げていく。近世に見られていた交流の様子が崩壊していく様を挙げ、現代まで続く差別の土壌が何であったのかを確認していくための章である。

第四章にては、解放令からの部落改善運動を確認する。解放令後、苦しい生活環境を打破すべく部落改善運動が次々と興る。その運動が現在まで続く人権団体の発生へと繋がっていくが、運動の掲げた目標とはそもそもどのようなものであったのだろうか。明治三九（一九〇七）年頃から会合が発足していく。まず、初期に信州にて発生していた会合に関しては、「融和」を中心としていた。「融和」とはすなわち、かつての交流が有る共同体の構築を掲げるものである。

それに対して、大正一一（一九二二）年から発足がなされていった水平社には別の動きが発生している。例えば、信州では「臼田警察署差別糾弾闘争事件」にて差別発言を行った巡査や、巡査を擁護した署長に対して激しく抗議活動を行った。結果として、この事件では部落民側が勝利し、水平社の力を見せ付けることになったのである。この事件に見られるような差別行動に対する「糾弾」を掲げる水平社が中心に移り変わっていった。この結果、権力者や政策に対し過激に口撃を行う運動が中心となったのである。融和運動が中々実を結ばないことに嫌気が差した人々によって「差別糾弾闘争」が中心となっていった。新たな運動の結果、対立が深まっていく様子になってしまった点については、非常に遺憾なことである。近世から見られた交流、近世での交流を取り戻す融和の弱体化によって、かつての穢多と平人との在り方はここで途絶えてしまったといえるであろう。

近世と近代の二つの時代の対比を行うことで見えてくる両者の差を述べた。

すなわち、近世の交流見られる世界と、それが崩れていく近代明治以降の二点である。今回発見できた事柄は、差別が激しいはずの時代であっても、決して差別一辺倒ではない間柄が存在していたことを明らかにしてくれている。

部落に対する差別はどのようなものであったか。どれだけ悲惨であったかを知り、今はこのようなことがないように、と部落の歴史を調査することも一つの方向性として間違っていない。だがそれだけではなく、今回見られた共同体の仲間として助け合う関係、あるいはお互いを知り「穢れ」という障害を越えた関係が出来ていた時代を知ることために部落史の調査を行うこともまた、真に部落民を理解するために必要な事項である。

そしてそのように新たな方向性を模索し、知ることは差別に対する抵抗を行う手掛かりとして活用できるだろう。今回は信州のみを取り上げたが、他の土地であっても同様の仲間意識は見受けられるであろう。仲間意識のみでなく、「穢れ」のような差別意識の再確認もできる。それぞれの持つ固有の関係について再度確認を行うことも、重要に違いない。また、本論文に

において近代に関しては交流の崩壊した面を大きく取り上げたが、史料の再確認を行うことで当時にて見られる仲間意識の発掘もできるだろう。本論文のように、過去を遡り、当時の在り様を理解することには部落史の理解に大きな意義のあるものであろう。